

「そしある」さん 第 5号

2026年 3月発行 編集担当：樋口

●自己研鑽を絶やさない～研修及び調査、研究（その4）～

研究については、「ソーシャルワークは実践科学である」「ソーシャルワーク研究はソーシャルワーク実践と理論を繋ぐこと」「実践研究とは、理論や解釈によって実践を省察し、新たな課題に取り組む過程」等々といわれ、分かったような分からないようなままで、何十年も現場で過ごしてきた。研究の原点・芽といえる「疑問（問い）」は、たくさんあったのに・・・。

「保健医療分野における研究は、特定の疾患、療養の局面に焦点化した研究テーマを設定する点で特徴がある。」（高山恵理子、2019）。調査をして報告はしたが、研究の体をなしていなかったり、事例を記録し報告しても、事例研究として深めることができなかつたり。そもそも研究の基礎を体系的に学んでいなかった。ある時期から、学会でも質的研究・量的研究、データ分析、等々の言葉が飛び交いアカデミックな雰囲気になった。周りに学会発表を勧めても、その研究方法・過程を丁寧にサポートできず、その代わりに医師が指導してくださった。研究する環境として恵まれているともいえる反面、何だかアイデンティティが揺らぐようにも感じた。ソーシャルワーク研究者との繋がりが弱い現状があった。

そして研究に対する未熟さを思い知らされたのは、定年退職後、大学教員になってからだ。就任当初、診療録・相談記録調査による後方視的、横断研究、後ろ向き研究（IC=オプトアウト）として、過去の診療録からデータ収集する計画書を研究倫理審査委員会に提出した。しかし、「研究対象者の権利利益を不当に侵害するおそれがないとはいえない、対象者から個別に同意を得る等の方法変更の検討を」等の意見があり認められなかった。そもそもオプトアウトに対する規定がないということでもあったようで、医学系と社会学系の研究の違い（？）に戸惑い、何だか“SWなのに個人の尊厳を尊重しないのか？！”と言われたような気持ちになり、調査期間や同意書を頂く方法に変更して取り組む気力が薄れ、再審査は受けずじまいになってしまった。在職した5年間はコロナ下になり調査もできなかったが、病院の中のSWとして育ってきたからか？と、環境の所為にしたくなった。

それで、卒論（学士論文）ゼミの学生と「研究とは？」から一緒に学び直すことにした。卒論では、福祉職離れやSWの認知度等をテーマに、アンケート調査やグループ・インタビューの方法で質の高い論文をまとめる学生もおり嬉しかった。皆さんは大学で研究論文を書いた学士ですよ、卒論はライフワークに繋がるので折に触れて読み返してねと励まし、採用面接の時はどのような卒論を書いたかアピールしなさいと指導した。

時間がない実務者とフィールドがない研究者はジレンマを抱えている。現場には「疑問（問い）」が溢れており、事例もデータもたくさんある。それらを実践者と研究者が共同研究する体制が必要だ。その研究に当事者の皆さんも加わってくださると、なおソーシャルワーク研究らしくなるだろう。幸いなことに、県内にも大学院を修了したMSWが複数人いる。研究というと敷居が高く感じるが、「疑問（問い）」にどうして取り組もうと思ったのか？どのように取り組んだのか？を聞くだけでも学びになる。気負わずに「研究の眼・芽」を育てる場を作り、修士の皆さんも積極的に語って欲しいと願っている。

●MSWのつぶやき（編集後記）：

とても古い話で知らない人が大多数だろうが、NHKで1970年から73年に放送された「ネコジャラ市の11人」のネズミのキャラクター、「ベンキョーチュー」は「勉強になるなあ～」「ボク勉強チューなんですよ」が口癖で「アップル」という秀才と共同で問題を解決していた。私はいつも「勉強不足でお恥ずかしいですが、、、」と前置きして質問していたなあ。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」ということわざもあることだし。恥ずかしかったのは漢字の読み方の間違いを指摘された時、今でもドキドキしてしまう。でも最近は、聞いたらついつい小言や愚痴を言うので、自分流に解釈し「見ざる・言わざる・聞かざる」にしようと努力チュー！。認識の間違いや、お気づきの点がありましたら、ご指摘ください。内容へのご意見・ご感想もお寄せ下さい。●連絡先：m.higuchi@okiu.ac.jp